



地域の底力——早稲田

東京都新宿区早稲田

地域との連携を広げ、 多角的な町づくりを目指す、頑張る商店会 「早稲田大学周辺商店連合会」 を訪ねて

日本随一の大学町を形成している早稲田大学界隈。
だが、長い休み期間中には人口が半減し、
学生気質の変化もあって地域の悩みは深まるばかりだった。
それを何とかしようと立ち上がったのが商店会の人々である。
昔のような人間同士の心の結び付きを蘇らせ、
大学と町が一体となった地域づくりを目指す取り組みを追った。



早稲田大学のシンボル・大隈講堂。
大学関係者だけでなく、この街に
住む人には懐かしい存在。

学生以上に大学を 愛する町の人々

都の西北にある早稲田大学。今はキャンパスがあちこちに散らばっているものの、全体で学生数一〇万人を数えるマンモス大学の本拠地は、やはり大学名にもなっている早稲田キャンパスであ

る。学生数は約三万人、町全体が日本随一の大学町として機能している。

大学と学生たちを見守ってきたのが町の人々。数年間で入れ替わる学生以上に大学と共に生き、愛する人たちがここにはたくさん暮らしている。

前早稲田商店会会長・前衆議院議員で、早稲田に生まれ育った安井潤一郎氏もその一人である。安井氏の家はスーパーマーケットを営んでおり、安井氏はその跡取り息子だった。地元の戸塚第一小学校を卒業後、私立早稲田中学・早稲田高校を出て早稲田大学に入ったという「早稲田の申し子」のような人物である（すべての学校に歩いて一〇分以内で通える）。

その安井氏が言う。

「早稲田界隈の商店会の悩みは、長い休みの間、開店休業状態になっ

てしまうことでした」

特に夏休みの時期、二カ月間も客足がばったり途絶える現実には、商店経営者に高い壁となつて立ち

町のあちこちにある街灯は、早稲田カラーの臙脂に塗られている。「W」や「WASEDA」の文字が躍る。校内で行われるイベントの旗が下がっているのも、町内会の考えから生まれた。



全部で七つある早稲田の商店会のうち「早大南門通り商店会」のある通り。



たという。

「私が子供のころ、この界隈の子供たちはみんな早稲田の校歌や応援歌が歌えたもんですよ。それは、町に下宿している学生さんたちが野球の早慶戦に連れて行

のだ。安井氏自身、初めて早慶戦に行った時の感激が今も忘れられない。大学があるから商売が成り立つという関係以上に、安井氏の世代は濃い人間同士のつながりによって大学と結ばれてきたのである。それが薄れてしまった

のは、大学紛争が原因だった。

「学生たちが騒いで周辺の家が被害を受けても、大学は補償しやうとしない。一方どさくさに紛れて被害もないのに補償を求めよ

学生は小さな子供を早慶戦に連れて行く。親は感謝しながら学生に小遣いを渡し、「試合が終わったらうちに来てご飯を食べな

よ」と彼らを招き、もてなしたも



「早稲田の申し子」を自任する安井潤一郎氏。最初の「エコ・イベント」を成功させた人物。

「エコ」を掲げたイベントの成功

うとする町の人間もいた。そんなこんなで相互不信になっちゃったんです」

持ちつ持たれつであるべき大学と町が、かつてのような親密な関係を失ってしまったのだ。

安井氏が早稲田商店会の会長に就任したのは九三年のこと。以前はそれほど商店会活動に熱心ではなかったそうだが、会長となれば変わらざるを得ない。会長就任三年目で生まれたアイデアが、「町の夏枯れ対策」であるイベント開催だった。

「考えたのが、大学にキャンパ

スを無料で貸してもらって開く野外コンサートでした」

町の振興に関心のある新宿区の協力も取り付けて大学に交渉すると、無料でキャンパスを貸し出したことなど一度もなかった早稲田大学が、八月に一日、大隈記念講堂前の広場を提供してくれることになった。新宿交響楽団や早稲田実業学校高等部のブラスパンド部の出演も決まったが、何か一つ芯を貫くテーマがほしい。

「そこで出てきたのが『環境』でした」

今でこそ「エコ」「エコ」と賑（にぎ）やかだが、当時エコを前面に打ち出すイベントはそれほどなかったのである。

「当時の新宿区長が『粗大ごみの程度の良いのをもらってきて、エコ・オークションをやったらどう？』と言うので、清掃事務所に掛け合って粗大ごみをもらってきました。また、日本中の環境機器メーカーにブースを出展してもらって、ブースの真ん中でエコ・オークションやフリーマーケットをやることになりました」



話題を呼んだのは「ゲーム付き空き缶回収機、ペットボトル回収機」である。空き缶やペットボトルを入れると機械に組み込まれた液晶画面でゲームができ、勝った場合はラッキーチケットが出るといふもので、安井氏はラッキーチケットを商店会から出すサービスチケットにした。賞品として提供されたのは、商品割引券、コーヒーの無料サービス券、ラーメン注文者に餃子一皿サービス券、ハンバーガー注文一個につきコーラSサイズサービス券など。さらに地元ホテルの無料ペア宿泊券（七万円相当）という豪華プ

レゼントが当たるとあって、イベント当日は大人気となった。

回収された空き缶は一三〇〇個、イベントで売っていなかったはずのペットボトルも一三〇本。集まったごみの再資源化にも挑戦し、大きな成果をあげた。生ごみはコンポスト（注）にして、長年早稲田と付き合いのある福島県奥会津の金山町に送り、向こうの特産品を町内で売ることも考え、実行に移した。苦肉の策として使った「エコ」という看板が、だんだん早稲田の町に根付いていった。第一回のイベントは、マスコミでも大きく取り上げられ、

毎年恒例となった「エコサマーフェスティバル」。地元住民や学生が集まって大変な賑わい。マスメディアもたくさんつめかける。ここで膨大なリサイクル用資源が回収されるという。

（注）都市ごみを発酵させて作った堆肥。



大学施設である大隈庭園は町内会の申し入れで地元住民にも公開されている。子供の姿が多い。

大成功に終わった。

「震災疎開パッケージ」が意味するもの

次の課題は、成功を一過性のものにしないことである。夏休みの早稲田ではなく、学生でいっぱいになる早稲田で、次の手を打たなければならぬ。

そこで、秋に入って十一月五日から三十日までの約一カ月にわ

たる「ごみゼロ平常時実験」が始まった。昔も今も、学生のマナーは決して上等とはいえない。空き缶を平気でポイ捨てる輩も後を絶たなかった。

「でも、新たに設けた『エコステーション』に空き缶を集めて持ちいき、回収機に入れるとハワイ旅行が当たる仕組みにした途端、キャンパスから空き缶が消えましたよ」

実験期間のうちわずか一週間



NPO 法人『全国商店街まちづくり実行委員会』が運営する『震災疎開パッケージ』を商店会で販売。



のコア期間だけで、集まった空き缶は二万四〇〇〇個、ペットボトル一七〇〇本、生ごみ七トン……。空恐ろしいほどの実績である。ラッキーチケットを提供した店舗の売り上げにも貢献した。「リサイクルを取り入れた店は繁盛する」。これが実感だったという。一方「エコサマーフェスティバル」も毎年続けられた。さらに障害者や高齢者も暮らしやすいバリアフリー推進活動に取り組み始め、それがきっかけで「早稲田いのちのまちづくり実行委員会」が発足。情報化、地域教育、商店の振興など実行委員会の中に部会を設けて、積極的な活動を図った。

この取り組みに各界の注目が集まり始め、地方の中学生の修学旅行コースに組み込まれることも増えてきた。

「活動を進めていくうちに、次の柱ができました。それが震災対策です。早稲田商店会の活動が知られるようになって修学旅行生だけじゃなく、大人も来るようになった。その中に阪神淡路大震災で大変な被害を受けた神戸市長田区の人たちもいました。震災で

丸焼けになった町を復興再生するための新しい切り口を探して来られたんだけど、先方の話の方がずっとこちらの刺激になりました」



いかにも学生街らしい店舗が連なる商店会。だが、学生が忙しくなり気質も変化したためか、継続できずに閉店する店も増えてきた。後継者が町に住み続けられるような町づくりも商店会の大きな課題となっている。



スーパーマーケットだった安井氏の店は提携先の自治体が生産する安全な食品を売る店に姿を変えた。

火災を消したくても水がない。家の下敷きになった家族を置いたまま逃げなければならなかった人たちの苦しみ。それは決して早稲田の町にとっても人ごとではない。人口の多い東京で、避難所をすべて行政任せにすることへの疑問もわいてきた。

「そこで出てきたのが、NPO法人『全国商店街まちづくり実行



委員会』が運営する『震災疎開パッケージ』でした。お客さんにパッケージをお買いいただく。年会費が今は一万五〇〇円です。いざ災害に遭ったら新潟県や福島県の提携先施設に疎開できますが、起きなかったら年に一回全国の特産品が届くという仕組み。避難所の下見ツアーもあります」

大きな災害が起きると、避難所暮らしを強いられる。大きな施設で過ごすストレスで亡くなるとか、病気になる二次被害も後を絶たない。だが、地域間交流としてのパッケージがあれば、一定期間を落ち着いて過ごすことができ、新生活への意欲も養える。また、疎開先下見ツアーに参加すればその地域への親近感が生まれ、新しい交流につながっていく。

「ツアーに参加してみたら、行った先で大歓迎されて『これだけで生きる意欲がわいた』なんて人がいましたからね（笑）。今の七十代ぐらいの人は、もう自分の田舎がないんですよ。親が死んで、兄弟も弱ってしまい甥姪の世代になっていたら、故郷にも帰りづらくなるでしょ。それなら自分た



「鉄腕アトム」が生まれたのが高田馬場だったという縁から、商店会では「馬力」を単位とする「アトム通貨」を発行して、需要の喚起に努めている。最高は「百馬力」である。

ちで田舎を作ればいい。『疎開先下見ツアー』できっかけが生まれるかもしれない」

衆議院議員当選で忙しくなった安井氏はスーパーマーケットをたたむことになったが、今では地域のつながりを生かした特産品や有機食材を売る店を、子息と一緒に運営している。新しいつながりが次の仕事に結び付いたのである。

店の二階にある事務所のデスクに、安井氏は「鉄腕アトム」のついたお札を並べて見せてくれた。

「これが『アトム通貨』です。漫画『鉄腕アトム』の中で高田馬場は天馬博士が鉄腕アトムを生



み出した場所となっており、そのご縁でJRの駅の発着音も『鉄腕アトム』なんです。アトムの十万馬力を生かして地域通貨を作る取り組みも始めました」

地域の神社を掃除してくれた人には「ありがとう」と言って一〇馬力を渡す。地域の中華料理店なら、江戸川区で穫れる小松菜を使ったピリ辛炒めを注文すると一〇馬力プレゼント。これは都内から運ばれるため流通コストが低いという理由でフードマイレージが付くからである。「たか



「早稲田大学周辺商店連合会」会長を務める清水恒夫氏。本業はクリーニング店と飲食店の経営者。早稲田大学と商店会とを結び、さまざまな折衝に当たる重要な役割を担っている。

大学との「WIN & WIN」が目標

安井氏の店を見学後、地下鉄早稲田駅そばのクリーニング店を訪ねた。そこでは店主の清水恒夫氏が待っていてくれた。清水氏は早稲田大学周辺にある七つの商店会を束ねる「早稲田大学周辺商

が一〇馬力」と侮ってはいけない。ピリ辛炒めの売り上げが二〇倍になったのである。大学食堂で小鉢の総菜を注文した学生にも一〇馬力。小鉢だと残菜が出ないからだ。ペットボトルのキャップをエコステーションに持ってきても一〇馬力。〇九年早稲田地球感謝祭では一日でなんと、キャップが七五キロ分も集まった。

店連合会」会長を務めている（早稲田商店会はその一つ）。安井氏とは違う立場で、早稲田大学と商店連合会を結び、大切な役目を果たしている。

「大学が大隈記念タワーを建設する際には一部の町会が反対の陳情を新宿区に持って行ったんです。そこで大学から相談がありました。『私たちもタワーを利用できますか?』と申し上げたら『使えるようにする』と。それを聞いて、私たちは早期着工の陳情を出したんです。地鎮祭の時にも鉾入れに参加しましたよ」

早稲田大学では校舎の建て替えが盛んに行われている。そのたびに周辺住民から反対意見が出される。工事が延びればコストが大幅にアップするのだから、大学も調整役を求めている。スムーズな工事を可能にし、住民にもメリットがある方向でまとめていく。「WIN & WIN」の決着を見るために、清水氏ら連合会の果たす役割は大きい。現在では大隈記念タワーにあるレストランのほか、大隈会館内の施設も町会の人々が利用できるようになっていく。



たくさんの学生が行き交う早大キャンパス。右は、創立125年を迎えるにあたり設けられた＜Uni.Shop & Cafe 125＞。ここでさまざまな早稲田大学オリジナルグッズが購入できるほか、お茶や食事が楽しめる。

このほか、地域の商店が建物を新たに作る場合、上階を大学が借り上げるシステムを作るなど、連合会ではきめ細かい交渉ごととも引き受ける。安定した家賃収入が得られれば、住民の子供たちも町を出ずに暮らしていけるからだ。もともと早稲田界隈は非常に治安が良く、暮らすには良い環境である。

早稲田の町を「心のふるさと」に

最近の学生気質の変化は、商売の在り方にも変化をもたらしているようだ。例えば以前なら町の



食堂でとっていた食事も、弁当派が増えてきた。

「今は昼休みが短くなってしまったし、キャンパス内の移動も慌ただしいので、外に出て食べるゆとりがなくなっただけです。そこで大学側に交渉して、キャンパス内でお弁当を販売させてもらうこ



とにしました。最初は入学試験の時だけの販売だったのが、今では通年販売になりました」

これも大学の特殊性だろうが、食堂やコンビニエンスストアを学内に導入しても、季節による売り上げの変化が激しすぎるため、すぐに撤退するのだという。今ある学内のコンビニは、学生の自治活動の一環として続けられているもの。地元の商店なら、継続して学生にサービスも提供できる。こういう話も、大学と連合会とのミーティングで進められていく。

「早稲田にちなむ商品も開発しました。『早稲田スイーツ』『地ビール早稲田』がそれです」

〇七年に発売された『早稲田スイーツ』は、早稲田の町にやってきた人に味わってもらおうと学

生たちを集め、いろいろな試作を経て作られた。入学式や卒業式のイベントがあると、保護者に喜ばれ、売り切れるという。このほか新宿の老舗おだんご店の協力で『早稲田饅頭』も生まれた。

左党向けにと作られた、早稲田の酒販店で販売している『地ビール早稲田』はコクのある本格派で、少し値ははるが、とてもおいしい。現在早稲田大学は校舎建て替えなどの資金を調達するため、OB・OGの寄付金集めに忙しく、白井克彦総長自ら地方にも出かけて行く。



「地ビール早稲田」はOB・OGや大学を訪れる保護者から人気を集めている。

「そういう時には、白井総長が行かれる地方の稲門会（早稲田の校友会）に『地ビール早稲田』の宣伝チラシを送るんです。宴会用にとずいぶんたくさん注文があります」

硬軟取り混ぜて、連合会はさまざまな活動を行っているのである。

早稲田大学では、学生数一〇万人のうち約一万人を留学生が占めている。清水氏は、遠い国からやってくる留学生に地元の活動にも親しんでもらいたいと考えている。日本人との心の触れ合いを体験してほしいのだ。

「穴八幡神社の祭礼の時にはお神輿と一緒に担いでもらったし、ビニールシートを敷いた宴会にも参加してもらいました。ルワンダから来た女子学生が涙を流しているんですよ。家族や親せきとやっているみたいで、ルワンダのお祭りと一緒だって……。安井さんのところの早稲田商店会のイベントも、学生や留学生が八割方を占めて、戦力になっていますからね」

人間関係が希薄になっている

暮れなずむ早稲田界隈。大学と町が一体となった、大学町特有の空気が流れている。



現代の学生たち。彼らに、自分たちが経験したような濃いつながりを味わってもらいたいと清水氏は言う。早稲田大学校歌「都の西北」には「心のふるさとわれらが母校」という歌詞がある。安井氏も清水氏も、その実現のために力を尽くしている。